

『正信偈』に親しむ ⑨

【本文・読み方】

【現代語訳】

みだぶつほんがんねんぶつ
弥陀仏の本願は、

永遠の仏の願いを信じ
忘れずに名を称える念仏は

じゃけんきょうまんあくしゅじまう
邪見驕慢の悪衆生、

おごりたかぶりあなどる
人たちには

しんぎようじゅじんになん
信樂受持すること、はなはだ

そのままの心では とても
信じられないことです。

なんちゅうしなんむかし
難中の難（これに過ぎたるはなし）

信心をおこすことほど
難しいことはありません。

いんどさいてんしろんげ
印度・西天の論家

インドなど西のかなたの
龍樹 天親という仏教思想家

ちゅうかじちいきしこうそう
中夏・日域の高僧

中国の曇鸞 道綽 善導 日本
の源信 源空という高僧は

けんだいしやうこうせしやうい
顕大聖興世正意

釈尊がこの世にお生まれに
なつた意義を現し

にようによらいほんぜいおうき
明如来本誓心機

如来の本誓、機に應ずる

ことを明かす。

仏の誓いが、すべての人びと
のおかれた現実になう救い
であることを明らかにしてく
ださいました。

【解説】

他人ばかりを見ている

真宗の教えは、「阿弥陀仏の本願を信じて、南無阿弥陀仏と念仏を申せば、浄土に往生して、仏になる」という、単純明快な教えです。

しかし、「行じ易く信じ難し」―南無阿弥陀仏と念仏することは、いつでも、どこでも、誰でも、できるのですが、「仏の名をとなえるものを、むかえとらん」と約束される、その阿弥陀仏の本願を信ずることは、容易なことではないのです。それでは、なぜ本願が信じられないのでしょうか。

日頃、私たちは自分の見方、判断が間違いないと信じて生活しています。そこでは、無意識のうちに自分の都合を優先しているのです。人を見ても、都合のよい人、都合の悪い人と選り分けていないでしょうか。自我意識が強く、自分自身に執着するのです。絶えず他者のせいにして自分を保身します。自らの罪の深さに気づくことがないのです。阿弥陀如来の本願は、そういう私たちのあ

りかたを悲しまれ、なんとしても真実に目覚めさせ、すくおうとされるのです。これが阿弥陀如来の摂取不捨（人をえらばず、へだてない）の大慈悲であります。

阿弥陀の本願に生きられた七高僧

人間は、いつの時代も民族・領土問題などをかかえて、相手を支配しようとし、殺害しあつてきました。そういう中で、民族や国のちがいを超えて、本願念仏の仏法に帰依する念仏者として、生きられた方がインド・中国・日本の七高僧です。仏法に生き、念仏をすすめ、お互いに御同朋として出会いを深めてこられたのです。阿弥陀如来の本願こそが真実であり、それによつてたすけられることを証してこられたのです。

親鸞聖人は、『正信偈』のなかで、「さあ、いっしょに七高僧のすすめられたお念仏に参加しよう」と呼びかけられるのです。

春のバスツアー三〇名が参加

仏教婦人会

さる四月十二日、仏教婦人会主催のバスツアーが実施され、『歎異抄』の著者である唯円が開いた興立寺

(奈良県吉野下市)を訪れた。車内では、『歎異抄』を読み、関係するビデオも観た。本堂ご尊前で拝礼。前住職さんから唯円さんのお話を聞いた後、唯円の墓前にも詣でた。

吉野川河畔にあるホテルで満開の山桜を楽しみながらの昼食。午後は「森と水の源流館」を見学した。吉野川に棲む生き物の様子が大型水槽で見られ、自然とともに生きる大切さを知らされた。

『歎異抄』は、いつの時代も人間にとって一番大事なことはなにかを教えてくれる書物である。思い出深い旅であった。今後も、聞法のご縁が深まることが願われる。



朱印帖ブーム??

元号が変わったことで、朱印をもらいたい人が長蛇の列をつくり、インターネットでも売買されていることをニュースで知りました。朱印の歴史はそう古くはないようです。参拝の記念にと朱印を売り込む寺もあると聞きます。三十二、八十八か所と巡礼にいくたびに、朱印の数も増え、満願の達成感は格別だったという声も聞かれます。

寺へ参ることはたいへん意義深いことです。ただ、朱印を集めるだけで終わるなら、ちょっと残念な気もします。寺に足を運びたい、参りたいと思いついたときの気持ちを大切にしたいのです。

寺は、ご本尊が安置され、仏さまの教えが説かれる場です。日常をはなれて教えを聞き、人間として生まれた意義や生きる喜びを見つけるきっかけにしたいです。私自身の体験ですが、何年もお説教を聞き、仏教書を読んでいると、一瞬自分が偉くなつた気になることがあるのです。教えに深くうなずけたと勘違いしていたのです。教えは鏡だと言われます。ご本尊に手を合わし、お念仏もうすことで、自身の生きかた全体が見直されることになるのですね。(y)

最近読んだ本

(編集後記に代えて)

「あふれたのはやさしさだった」寮美千子著作家の寮さんが、少年刑務所で更生目的の「物語の教室」での講師体験が語られる。

罪を犯した少年は、その行いによって誰かに深い悲しみを与えたことにちがいないが、その少年たちの多くは、自らが傷ついた体験をもつ。彼らの心が、劇を演じることで開かれ詩が生まれる。疎遠となった母親を慕う詩も多い。

ある少年は、自分が幼かったから、父親から虐待を受けていた母親を助けられなかったと悔やむ。その母親が、「つらい時には空を見てね。わたしはかならずそこにいるから」と言い残して亡くなった。少年が母の思いを雲に託して詠んだ詩に胸を打たれた。

「雲」 空が青いから 白をえらんだのです
雲が言っているのです。あなたはどこにいても私を見つけれられるように、(空が青い中でよく目立つ) 白い色を選んだのよとー

「私はあなたを見放さない。いつもあなたを信じているよ」と呼びかけているのだ。母親がわが子を思う心は、阿弥陀(撰取不捨)の願いと同じだと気づかせてくれる本である。(k)